室内歌劇「初子」一幕三場
原作：近松門左衛門作浄瑠璃　現代語台本・作曲：小菅泰雄
登場人物と配役
　初子　キャバレー「サンバ」のホステス　藤村　昌子
　徳男　叔父が社長の会社員　　杢子　　淳
　平次　徳男の先輩　　橋本　和明
所：東京台東区の「浅草寺」付近　又は　谷中霊園あたり
時：:現代
第一場　浅草寺付近のコーヒー・ショップにて
徳男　もしもし、先輩ですか。徳男です。例のコーヒー・ショップにいます。はい。呼び出したりしてすみません。待ってます。お願いします。（上手に向かって）コーヒーください。
平次　（下手より登場）待たせたな。（上手に向かって）コーヒーください。
徳男　来て早々にすみません。早速ですが、この間貸したお金ですけど。今日が期限なんでヽ返してもらえませんか?
平次　気でも違ったか徳男！お前とは長い付き合いになるが、金の貸し借りをしたことはない。
徳男　そんな。ごまかさないでくださいよ。あのお金は明日が期限で借りた金なんですよ。今日中に返さないと困ったことになるんです。願いしますよ。
平次　お前とは、金の貸し借りは一切してないって言ってるだろうが。
徳男　これは（懐から取り出す）この間の証文です。ほら、見て下さいよ。
平次　どれ、（ちょっと見る）このサインは俺の字じゃない。（突き返す）お前の字だ！　偽証文だ。お前！　偽証文まで作りやかって。それで、こんな話をもちかけるのか。ひでえやろうだぜ。こんな因縁着つけやがって、変なまねすると警察に突き出すぞ！
徳男　そんな！　先輩はそういう魂胆で、俺にこのサインをさせたのですか。
平次　判子も違う。これは三文判だ。俺は借金の証文に三文判は使わない。変な因縁つけやかって。ここは、お前が払っとけ。ははは（下手に退場）
徳男　畜生！　（放心状態で店を出る）
初子　（ステージ下手裏から呼びかける）徳男さん。
　　（下手より登場）徳男さん。徳男さん、ちょっと徳男さん。
徳男　ああ、初っちゃん。ここで何をしているんだい?
初子　それはこっちの台詞よ。私、お客さんと一緒なの。これから漫才聞きに行くところ。一間－　この頃お店に来ないじゃないの。すっかりご無沙汰だねえ。
徳男　初っちゃん、どこかに移ったって?
初子　なにそれ。私かどこへ行っても平気の？　あんたはそれで済むだろうけど、私は病気になっちゃうよ。嘘だと思うなら、この「胸のつかえ」を見なさいよ。　（徳男の手を胸に恂いて泣く）
徳男　泣くなよ。言っても埒があかないけれど、俺は本当に困ってるんだ。うちの社長は俺の叔父さんで、娘を俺に嫁がせようと、お袋に持参金1,000万円握らせてしまった。「社長のお嬢さんを持参金つきで来て頂いて、一生ご機嫌をとりながら暮らすなんざあ性に合いません。いやだ。いやなものは、いやでやんす。死んだ親父を生き返えらせても、いやだ。いやなものは、いやでやんす」
　　社長はマジでおこった。「風俗女と付き合いやかって、俺の娘を嫌かるたあ何事だ。娘がいやだと。娘はやらん。持参金を明日までに返せ。仕事は誰かと引き継げ。二度と東京に戻ってくるな」。
　　東京に戻れなくなったら、どうやって初っちゃんに会えばいいんだ？
初子　罪人じゃあ　あるまいし。東京に来られなくなったって、会う機会は作れわるよ。
徳男　俺、持参金1,000円を先輩に貸しちまった。返してもらえない。編されたんだ。明日までに返さないといけない。身の破滅だ。俺は死ぬしかない。悔しいよ。
初子　そうかい…。大変なことになってしまったね…。どうしたらいいんだろうね。どうしたらいいんだろうね。（徳男を見つめている）

第二場　　浅草寺付近のキャバレー「サンバ」にて　時：その夜
初子のアリア
　　恋に堕ちた私は蝋川の貝の殻
　　毎夜の明かりは冬の蛍か　雨夜の星か
　　真夏に桜の梅田橋
初子　可哀想な徳男さん。お酒も喉を通りゃしない。
徳男　（下手より登場）……。
初子　いらっしゃい。　あら！　徳男さん。ひさしぶりね。
徳男　（下手より登場）……。
初子　元気を出して。
徳男　八方ふさがりだ俺は。今夜あたり、逝ってしまおうか。覚悟を決めた。
初子　何の覚悟を?　何を言ってるのさ。こんなにしょげかえって。人に見られるじゃないか。こっちにおいで。一間－（徳男を隠す）ここで静かにしててね。いらっしゃい。
平次　（下手より登場）初っちゃん。寄せてもらうよ。ハハハハ…。
　　徳男の奴、ざまあないやね。借りてもいない金を、耳を揃えて返せだとよ。耳を揃えて返せだと。ハハハ…　偽証文を作って、因縁つけて、今日中に返せ、今日中に返せだとよ。徳男とは金の貸し借りは一切してない。とんでもねえ奴だ。
初子　（ゆっくりと）徳男さんは、誰かさんに臨されたんだろうけれどね。（普通のはやさで）証拠がなければ理屈も通らないやね。こうなったからには、徳男さんはこの世からおさらばしなきゃならないし、おさらばするんだろうけどね。（隠れている徳男に向かって）死ぬ覚悟が聞きたいね。
徳男　（隠れて頷く）
初子　いつまで生きていても同じことさ。
徳男　（頷く）
初子　この際だから死んで、生き恥を晴らしてやらないとねえ。収まりが付かないよ。
平次　何を言ってるんだ?　初つちゃん。徳男が何で死ぬものか。もし死んだら、初つちゃん、徳男の替わりは、俺がしてやるから安心しな。
初子　それは、どうもありがとうさん平次さん。平次さんは、徳男が死んじまった方がいのかい。今の言い方だと、徳男さんが死んじまった方がいいって思うわよ。（話しっぷりを、がらり変えて）
　　馬鹿言ってんじゃないわよ。私は、徳男さんと離れては、片時も生きていないんだよ。徳男さんは私と一緒に死ぬ。私も徳男さんと一緒に死ぬわ。徳男さんと私は死ぬも生きるも一緒なんだよ。
平次　どうしたんだよ、初っちゃん。雲行きがおかしくなったな。邪魔をしたな。又くるからな。おやすみ。

第三場　「谷中天王寺」　時　同じ日の深夜
初子・徳男の二重唱
　１．多くの歌から　あの歌を
　　よりにもよってこの夜に
　　歌うは誰ぞ
　　聞くのはあなたと私だけ
　２．尽きせぬ悲しみ　尽きる道
　　心も空も真つ暗で
　　風　しんしんの谷中なる
　　天王寺へと着きました
初子　七輪持ってきてるよ。
徳男　おお(努めて明るく)、窓(万目張りはしっかりやってある。
初子　一緒に死ねて、うれしいわ。
徳男　手をつないで、手をつないで一緒に死のうな。
「死に顔が見苦しい」つていわれるのは口惜しいわ。
　死に様の手本になってやろう。一間一
初子　懐かしいママ、名残惜しいパパ。親より先に死んで、ごめんなさい。私は悪い子です。一間一（声を上げて泣く）
徳男　親父は元氣かな。お袋は、大丈夫かな。
　　社長の叔父さんには持参金を返せずに、その上この世とおさらばとは。二重に迷惑をかけて、俺は本当に恩知らずで身勝手な男だ。
初子と徳男の二重唱
　　明日は大騒ぎになるね。一間一
初子　何時まで言っても仕方がないね。さあ一緒に死のう。
徳男　七輪に火をつけるよ。
初子　はい。
初子・徳男の二重唱
　　この世のなごり　夜もなごり
　　死に逝く我らを例えれば
　　あの世に旅立つ道の霜
　　一足ごとに消えてゆく　消えてゆく　　完結